

琉球大学学術リポジトリ

[原著] 歯科口腔外科外来初診患者の臨床統計的観察
: 昭和61年-昭和63年

メタデータ	言語: 出版者: 琉球医学会 公開日: 2010-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): climco-statistical observation, out-patient 作成者: 砂川, 元, 東, 哲世, 山城, 正宏, 金城, 孝, 新崎, 章, 儀間, 裕, 西平, 守昭, 山内, 和夫, 古堅, 京子, 比嘉, 優, 喜舎場, 学, 津波古, 判, 新垣, 敬一, 我那覇, 宗教, 神谷, 茂, 大嶺, 裕, 黒鳥, 直克, Sunakawa, Hajime, Azuma, Tetsuyo, Yamashiro, Masahiro, Kinjo, Takashi, Arasaki, Akira, Gima, Hiroshi, Nishihira, Moriaki, Yamauchi, Kazuo, Furugen, Kyoko, Higa, Masaru, Kishaba, Manabu, Tsuhaiko, Wakatsu, Arakaki, Keiichi, Ganaha, Munenori, Kamiya, Shigeru, Online, Yutaka, Kuroshima, Naokatu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015868

歯科口腔外科外来初診患者の臨床統計的観察

—— 昭和61年～昭和63年 ——

砂川 元、東 哲世、山城 正宏、金城 孝、新崎 章
 儀間 裕、西平 守昭、山内 和夫、古堅 京子、比嘉 優
 喜舎場 学、津波古 判、新垣 敬一、我那覇宗教、神谷 茂
 大嶺 裕、黒島 直克

琉球大学医学部歯科口腔外科学講座（主任：山城正宏教授）

（1991年12月24日受付、 1992年 5 月 8 日受理）

緒 言

琉球大学医学部附属病院歯科口腔外科は、昭和48年に同大学保健学部附属病院歯科口腔外科として開設された。その後、昭和56年4月に現在の名称に変更され、更に、昭和60年4月からは医学部の一講座として日常の診療に重点をおきながら治療水準の向上を計り、本講座の基礎的ならびに臨床的研究を積み重ねてきている。

今回われわれは、当科における歯科・口腔外科疾患の診療内容を把握、検討し、今後のわが講座の臨床・治療学発展の一助とすべく、昭和

61年1月から昭和63年12月までの約3年間における当科外来初診患者の臨床統計的観察を行ったので、その結果を報告するものである。

対象および方法

昭和61年1月から昭和63年12月までの約3年間に当科外来を受診した初診患者4,394例（昭和61年1,440例、昭和62年1,445例、昭和63年1,509例）を対象とした。対象例の男女別内訳は、男性2,174例、女性2,220例であった（表1）。

方法は、対象観察期間内における当科での診

表1. 年次別・性別初診患者数

年次	男 性	女 性	男女計
昭和 61 年	698 例 (48.5%)	742 例 (51.5%)	1,440 例
昭和 62 年	716 例 (49.6%)	729 例 (50.4%)	1,445 例
昭和 63 年	760 例 (50.4%)	749 例 (49.6%)	1,509 例
年次計	2,174 例	2,220 例	4,394 例

療内容を把握するために、年齢別患者数、歯科疾患と口腔外科疾患の割合、月別平均患者数、口腔外科疾患別頻度について、さらに歯科口腔外科のはたしている地域的、社会的役割を知るための地域別患者数、紹介元の診療科別頻度について臨床統計的に観察、検討した。この中、疾患の分類区分を一般歯科疾患と口腔外科疾患に2分し、口腔外科疾患については 1)奇形、2)炎症、3)粘膜疾患、4)外傷、5)腫瘍、6)嚢胞、7)顎関節疾患、8)唾液腺疾患、9)言語障害、10)舌痛症、11)埋伏歯、12)血液疾患、13)神経疾患および14)その他、に分類した。なお、これら疾患の治療法ならびに治療成績の中、一部は既に報告¹⁻³⁾したが、さらに今後は、他の疾患についても検討し、報告する予定である。

結 果

1. 年齢別患者数

年齢別患者数を年代別にみると、20才代が760例(17.3%)と最も多く、次いで10才未満743例(16.9%)、30才代696例(15.8%)、10才代561例(12.8%)の順で減少し、70才以上では257例(5.8%)と、最も少なかった(図1)。

2. 歯科疾患と口腔外科疾患の割合

歯科疾患患者数は1,061例(24.1%)、口腔外科疾患患者数は3,333例(75.9%)であり、両者の比は1.0:3.1であった。また口腔外科疾患数を年齢別にみると、10才未満が最も多く、40才代で最も少なかったが、各年齢層でも65%以上を占めていた(図1)。

3. 月別平均患者数

月別平均患者数をみると、最も多くの患者が受診した月は8月で約153例、最も少なかった月は1月の約99例であり、夏期休暇の7・8月に多くの患者が当科を受診していた。また月平均初診患者数は約122例であった(図2)。

4. 地域別患者数

当科初診患者が初診時にどの地区から来院しているかを調査するために、ここでは他科入院患者を除いた3,819例を対象とした。その結果、県庁所在地である那覇市からの患者数は1,279例(33.5%)と最も多く、那覇市を含めた南部地区という行政単位で患者数を計上すると、1,947例(51.0%)であった。さらに、当科の所在している中部地区からの患者数は1,502例(39.3%)、北部地区からのそれは194例(5.1%)であり、本島内のその他の地区からの患者数と

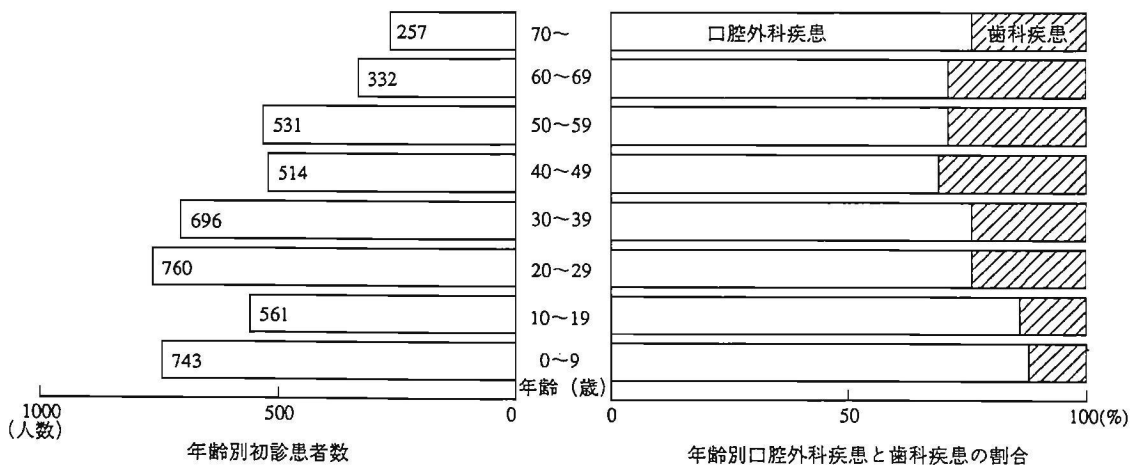


図1. 年齢別および疾患別頻度

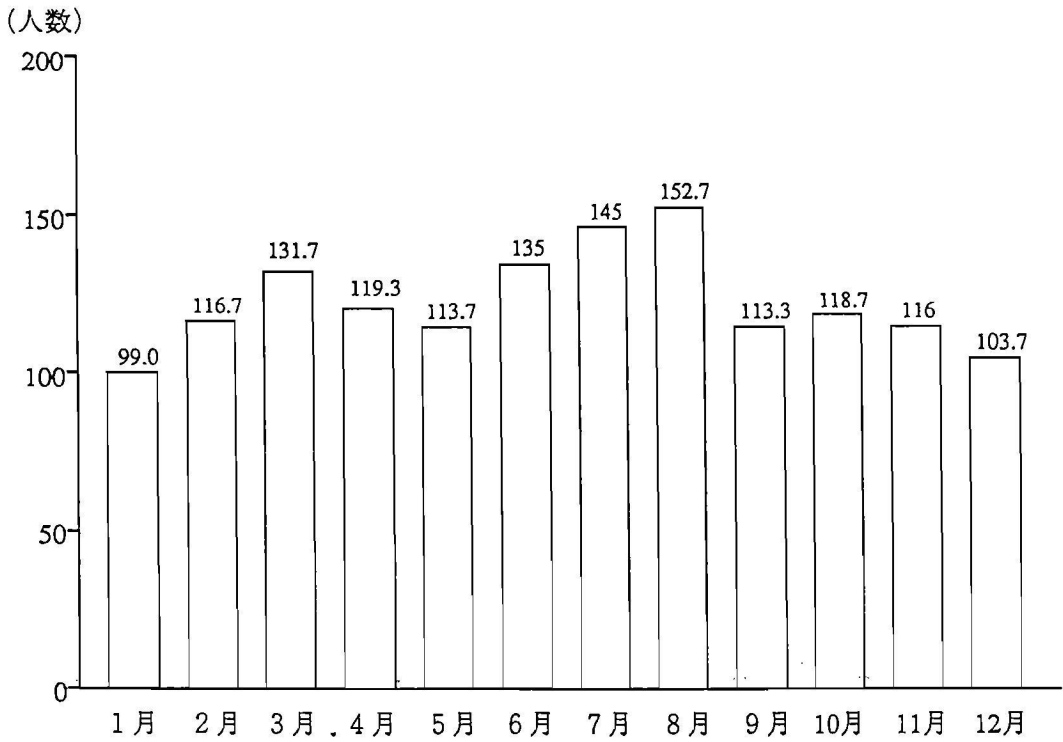


図2. 月別平均初診患者数 (昭和61年~63年)

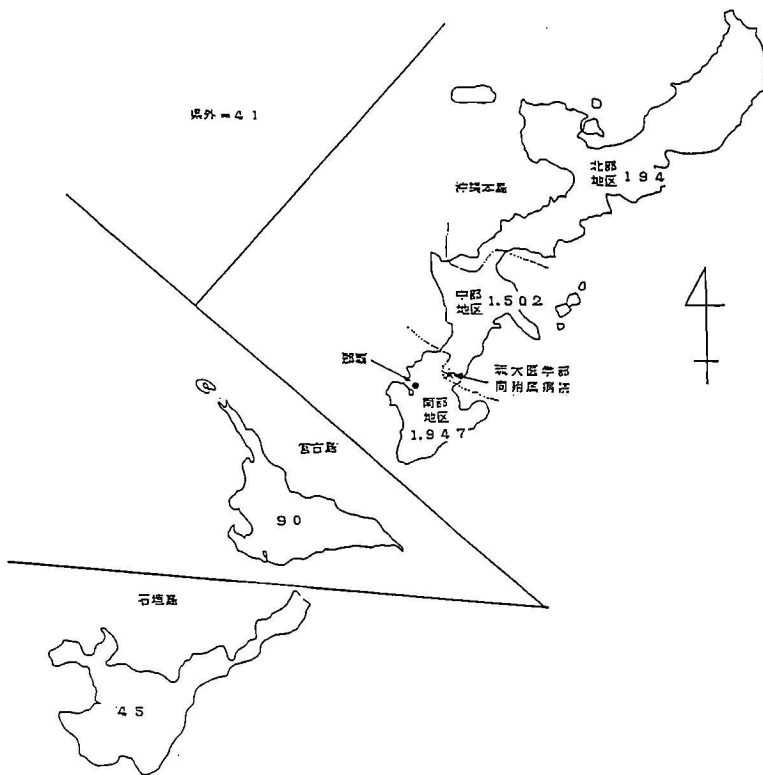


図3. 地域別初診患者数

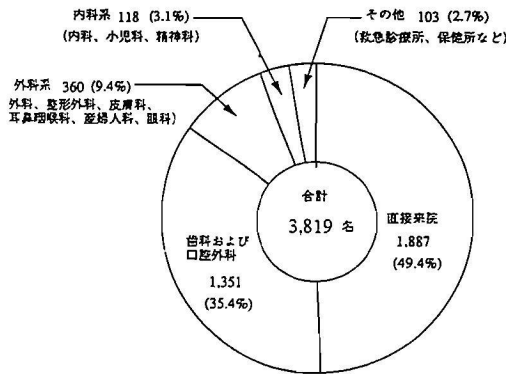


図4. 院外からの紹介頻度

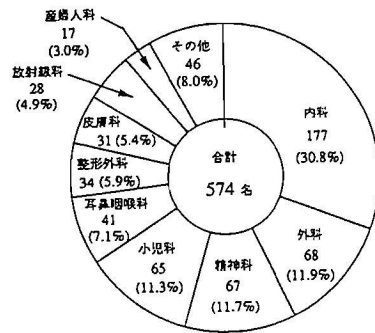


図5. 院内他科からの紹介頻度

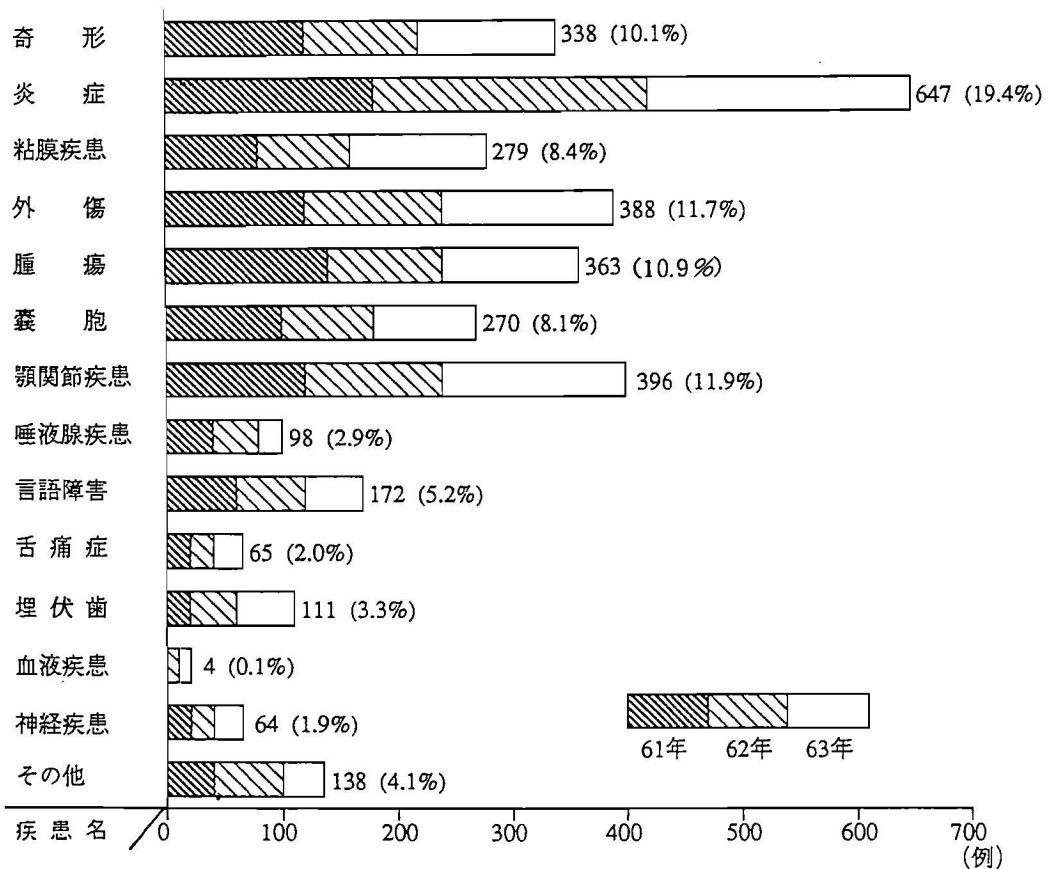


図6. 口腔外科疾患名別分類と頻度

表 2. 年次別炎症性疾患別内訳

疾患名	昭和 6 1 年	昭和 6 2 年	昭和 6 3 年	計
顎 炎	19 例	26 例	30 例	75 例 (11.6%)
顎骨周囲炎	33	19	22	74 (11.4%)
頬部膿瘍	1	2	5	8 (1.2%)
扁桃周囲炎	5	3	3	11 (1.7%)
蜂窩織炎	13	9	9	31 (4.8%)
上顎洞炎	6	15	16	37 (5.7%)
唾液腺炎	17	10	14	41 (6.4%)
リンパ節炎	3	7	6	16 (2.5%)
舌 炎	1	5	13	19 (2.9%)
智歯周囲炎	87	115	133	335 (51.8%)
	185	211	251	647 (100.0%)

表 3. 年次別奇形疾患別内訳

疾患名	昭和 6 1 年	昭和 6 2 年	昭和 6 3 年	計
口唇・口蓋裂	80 例	72 例	68 例	220 例 (65.5%)
小帯異常	32	29	24	85 (25.3%)
顎変形症	9	5	4	18 (5.3%)
咬筋肥大症	2	0	3	5 (1.5%)
その他	3	1	4	8 (2.4%)
計	126	107	103	336 (100.0%)

比較して、当科受診患者数は少なく、宮古、石垣などの離島からの患者は135例 (3.5%) と、最小の患者数を計上した。また同上期間中における県外からの受診患者は41例 (1.1%) を数え、その大半は主に鹿児島県 (与論、奄美大島) からの受診者であった (図 3)。

5. 紹介元の診療科別頻度

院外からの紹介患者に関しては、紹介状持参例が1,932例 (50.6%) であり、紹介状なしの直接来院例は1,887例 (49.4%) とほぼ同率で

あった。なお、当科を紹介される前に通院中の主治医から、口頭のみで当科への受診を指示された患者は紹介状なしのグループに含めた。一般開業歯科や沖縄県立中部病院および那覇市立病院歯科口腔外科からの紹介例は1,351例 (35.4%)、その他外科系 (外科、整形外科、皮膚科、耳鼻咽喉科、産婦人科、眼科など) 360例 (9.4%)、内科系 (内科、小児科、精神神経科など) 118例 (3.1%)、その他 (救急診療所、保健所など) 103例 (2.7%) であった (図

表4. 年次別腫瘍性疾患の内訳

疾患名	昭和61年	昭和62年	昭和63年	計
良性腫瘍				279例 [76.7%]
1 歯原性腫瘍	9例	5例	10例	24 (8.6%)
エナメル上皮腫	2	2	3	7
粘液腫	0	0	2	2
歯牙腫	3	0	1	4
セメント質腫	4	3	4	11
2 非歯原性腫瘍	100	81	74	255 (91.4%)
悪性腫瘍				84例 [23.3%]
癌腫	27	27	25	79 (94.0%)
肉腫	1	2	2	5 (6.0%)
計	137	115	111	363 (100.0%)

4)。

院内からの紹介では、内科からの紹介例が177例(30.8%)と最も多く、以下、外科、精神神経科、小児科、耳鼻咽喉科、整形外科、皮膚科、放射線科、産婦人科、その他(脳神経外科、泌尿器科、麻酔科など)の順であった(図5)。

6. 口腔外科疾患別頻度

歯性炎症などの感染症症例が最も多く、その症例数は647例で、全体の19.4%を占め、次いで顎関節疾患396例(11.9%)、外傷388例(11.7%)、腫瘍363例(10.9%)、奇形338例(10.1%)の順であった。その他の138例には抜歯後の出血あるいは疼痛、口腔内違和感などの不定愁訴例の口腔心身症、癌恐怖症、アレルギーなどが含まれていた(図6)。

炎症の中では智歯周囲炎が最も多く335例(51.8%)、次いで顎炎75例(11.6%)、顎骨周囲炎74例(11.4%)であり、これら顎骨の炎症例だけで炎症例数全体の74.8%(647例中484例)を占めていた(表2)。

奇形では口唇・口蓋裂が220例(65.4%)と最多で、小帯異常85例(25.3%)がそれに続い

ていた(表3)。

腫瘍は腫瘍類似疾患も含め全体で363例であり、その内訳は良性279例(76.7%)、悪性84例(23.3%)であった。良性腫瘍では非歯原性腫瘍が255例(92.1%)あり、この例数は歯原性腫瘍24例(8.6%)と比較して前者が圧倒的に多く、歯原性腫瘍の中ではセメント質腫11例、エナメル上皮腫7例であった。悪性腫瘍では癌腫が79例(94.0%)あり、肉腫の5例(6.0%)と較べ、圧倒的に例数が多かった(表4)。

考 察

今回われわれは、昭和61年1月より昭和63年12月までの3年間に琉球大学医学部附属病院歯科口腔外科外来を初めて受診した患者について、臨床統計的観察を行った。

対象とした3年間の総初診患者数は4,394例であり、1年間ではおよそ1,465例であった。男女差はほとんど認められなかったものの、男性より女性の方が若干多かった点で他施設の報告^{4-6,9-11)}と類似していた。

年齢別患者数をみると、20才代、30才代の患

者が他の年代の患者より多い点は他施設^{4, 6, 8, 9)}のそれらとほぼ同様であるが、10才未満の症例も743例(16.9%)あり、阪大⁴⁾のそれと同様に高い割合を示していた。たゞ、当科の場合、10才未満の症例のほとんどが裂奇形であるが、沖縄県にはそれに対応するstuffの充実した診療機関が少なく、当該患者が当科を受診しているためではないかと考えられた。このことは、唇顎口蓋裂児の治療に際しては形態的(審美性)回復のみならず、言語機能や咀嚼機能を改善することも重要であり、さらにこれらの患児は顎発育が不十分で、歯列、咬合異常をきたす例が多く、歯科的な治療が必要とされるため、言語治療士、歯科矯正医や歯科口腔外科医などのstuffによるチーム・アプローチが可能な診療機関である当科や阪大口腔外科に裂奇形症例が多く集まる結果となるためと推測される。

また、20才代の初診患者の受診率が高いのは智歯周囲炎と外傷症例がより多く受診しているためで、30才代の患者では炎症と歯科疾患が多く認められ、「長寿県」といわれる割には70才以上の患者がより少ないといったことなどはあるとしても、これらの量的側面では他施設⁴⁻⁹⁾でも同様の傾向であったといえよう。

他方、一般歯科疾患患者数は1,061例(24.1%)、口腔外科疾患患者数は3,333例(75.9%)であり、両者の比は1.0:3.1と口腔外科疾患患者の方が相対的に高い割合を占めている。この割合は佐医大⁵⁾や近大⁹⁾の報告と類似しているが、宮崎医大⁷⁾や富山医薬大⁸⁾より高い数値であった。また、一般歯科疾患患者が少ないことは、当科では歯科治療を他科入院患者や本学職員および学生を対象患者が限定されているためと考えられる。このことは本来、歯科口腔外科においても一般歯科治療を行うことは多くの歯科疾患患者の健康を保持するということが大切なことではあるが、基本的に大学病院歯科口腔外科が歯科疾患の二次、三次医療機関であることから、当科では患者居住地近くの歯科開業病院を紹介しているのが現実であり、さらに、他科の長期入院患者や一般歯科開業病院で治療の困難な有病者、時間的な都合などで開業医への通院が難しい職員、学生等について

の歯科口腔外科的疾患の管理は当科で行われるべきものであると考えている。また、口腔外科疾患患者が10才未満の小児に最も多いのは、前述のごとく、裂奇形症例が多いのが当科の特徴であることと、10才代の患者が多いのは外傷例が多く認められるため、特に当科の外傷例では他府県のそれと比較して10才代の自動二輪車事故によるものが目立っていた点で特徴的である。このことは沖縄県には鉄道などの大量輸送機関がなく、高校生の通学ならびに青年の通勤などに自動二輪車を利用する人が多いことや、外傷患者の受傷時間などから推測すると、むしろこれら自動二輪車による深夜の暴走や飲酒運転が主な原因であるとも考えられる²⁾。

月別平均患者数では他施設⁵⁻⁹⁾と同様7・8月の夏期休暇に多く、12・1月の冬期に少ない傾向を示している。このことは、7・8月の夏期休暇の時期に『口唇形成術』後の変形治療に対する修正術を希望された学童や交通事故障害による青少年などが多く、これに対して冬期にはこれらの患者が少ないためと年末・年始に当科の休診日が多いためであると推測される。

地域別受診患者数では那覇市を含む南部地区からの症例が1,947例と、当科の所在する中部地区(1,502例)より多い結果であった。これは当科が図3に示したように南部地区に隣接し、その上、南部地区でも特に人口(平成3年3月31日現在で住民基本台帳に記録された人口:307,546人)¹²⁾の多い那覇市からおよそ1時間で来院できる距離にあることや診療設備、stuffの充実している当科へあえて受診していることによるものと考えられる。

また、北部、離島地区には口腔外科専門治療機関が設置されていないにもかかわらず受診患者が少ないのは、北部地区では大半の患者が中部病院を受診し、裂奇形、外傷、悪性腫瘍などの、より高度の口腔外科的治療の必要なこれらの地区の患者が、前述の理由で当科を紹介されて受診しているものと推測された。

県外からの患者は上述の3年間で4,394例中41例(0.9%)と少なく、佐医大⁵⁾の4,094例中437例(10.7%)、富山医薬大⁸⁾の4,185例中72例(1.7%)と比べて、より低率であった。また、

これら2施設と比較して新患総数では大差はないものの、県外からの受診患者が相対的に少ないことは、島嶼県である特殊な地理的条件に由来するものと考えたと当然の事と思われた。

院外からの紹介患者数については、当科では4,394例中3,819例(50.6%)であり、阪大⁴⁾の6,808例中3,124例(45.9%)、宮崎医大⁷⁾の6,154例中2,554例(41.5%)より受診頻度ではやや高値を示している。その理由としては県下に口腔外科の診療機関が少ないことと、当県の地理的条件、あるいは、旅費などの経済的条件により他県の病院に紹介されることが少ないためであろうと考えられた。また当科における歯科および口腔外科関係医院からの紹介数は3,819例中1,351例(35.4%)であり、阪大⁴⁾の6,808例中2,355例(34.6%)とほぼ同頻度であるが、宮崎医大⁷⁾の2,554例中1,732例(67.8%)よりかなり低値であった。しかし、本報告で3,819例中1,887例(49.4%)を占める直接来院患者の中には、口頭による被紹介患者数をも含めたために低値を示したものと推測され、これら口頭による紹介例を含めると歯科診療機関からの紹介例は現実にはさらに高い割合を示すものと思われる。このことは当科が地域歯科医療機関に対する役割も十分にはたしているものと考えられる。また、院内からの紹介は、内科、外科、精神神経科、小児科の順に多く、宮崎医大⁷⁾の報告と類似しており、そのほとんどが慢性疾患を有する患者の歯科治療が主体であった。このように当科初診患者の中、院内外からの紹介患者が4,394例中2,507例(57.1%)、また直接来院患者のほとんどが口腔外科的疾患あるいは有病者の歯科疾患であることから、当口腔外科が十分に社会的役割をはたしているものと考えられる。

う蝕・歯槽膿漏などの一般歯科疾患を除いた口腔外科疾患別割合をみると、他施設⁴⁻⁹⁾と同様に、当科でも炎症や外傷症例の受診頻度は高い。反面、これらの施設に比較して腫瘍や顎関節疾患の受診頻度は高く、嚢胞性疾患のそれは低い。これらのことは腫瘍および顎関節疾患がより口腔外科の専門的治療が必要であり、嚢胞性疾患は一般歯科開業医でもその治療が可能で

あることを示唆しており、沖縄県に口腔外科診療機関が少ないためであるという特徴の一つが示されているものと思われた。また、図6に示した唇裂・口蓋裂を伴わない言語障害(精神発達遅滞あるいは脳血管障害などによる)が5.2%(172例)も占めている理由としては、当科では専門の言語治療士が言語のトレーニングやリハビリに従事して、その事が脳外科などの医師あるいは検診時の医師・看護婦・保健婦などの指導や言語障害を持つ子の親同志の口伝えなどの影響で、当科を受診するケースが多くなるためと推測される。

奇形症例336例では口唇・口蓋裂が220例(65.4%)と圧倒的に多いが、これは小帯異常例が過半数を占めている防衛医大¹⁰⁾や長岡赤十字病院⁶⁾の報告とは異なっていた。しかし、これらのことは前述のように当県には裂奇形の診療機関が少ないことに由来する患者が当科に集中しているためと考えられる。

下顎隆起、口蓋隆起、外骨症などの骨腫およびその類似病変も腫瘍という分類に一括すると、腫瘍は3年間で366例であった。良性腫瘍279例では非歯原性腫瘍が255例(91.4%)と圧倒的に多く、他施設^{4, 6, 8, 9)}の報告と類似しており、歯原性腫瘍でもセメント質腫、エナメル上皮腫、歯牙腫などの症例が多くを占め、頻度的には非歯原性腫瘍の場合も前述の他施設と同様であった。悪性腫瘍に関しては、当科では癌腫が79例受診しており、年平均では26.3例を数えるが、佐医大⁵⁾の10.5例、長岡赤十字病院⁶⁾の6例、富山医薬大⁸⁾の9例、近大⁹⁾の15.4例などと比較すると、より多い症例数であった。これは口腔癌患者の大半がまず歯科医院を受診していることと、口腔癌治療施設の少ないこと、さらに地理的・経済的条件などから患者があえて他府県に受診する事が少ないことによるものと推測される。

現在わが国における65才以上の人口比率は約10人に1人であり¹³⁾、平成12年には6人に1人となって、全人口の約16%に達するものと推測されている¹³⁾ように、これから「高齢化社会」へと進む中で高血圧、糖尿病などの有病者の歯科治療患者が増加するものと考えられる。とく

に高齢者ではう蝕のみならず歯槽膿漏などの歯周疾患や腫瘍性疾患の増加とそれに伴う口腔機能の低下が認められるだけに「よく咬める」「よく話せる」などの口腔機能の保持は、健康を保ち、よりよき人生を送るためには欠かすことができないものであると強調できよう。さらに、これらの結果をふまえると、顎顔面外傷、口唇・口蓋裂、口腔腫瘍、その他の疾患の治療に際して、口腔機能と形態（審美性）の保持が十分に考慮されるべきであり、このことは口腔疾患の治療に携わる歯科医師のなお一層の診療技術向上と同時に口腔疾患予防に関して努力することの重要性を示唆するものであると考える。

結 論

昭和61年1月より昭和63年12月までの3年間に琉球大学医学部附属病院歯科口腔外科を受診した外来初診患者について臨床統計的観察を行い以下の結論を得た。

1. 初診患者総数は4,394例（男性:2,174例,女性:2,220例）であり、年齢別には20才代が最多であった。
2. 月別平均患者数は夏期休暇の7・8月に多く、12・1月に少なかった。
3. 歯科疾患と口腔外科疾患の割合は1.0:3.1であり、各年齢層とも口腔外科疾患が65%以上を占めていた。
4. 当科を受診した地域別の患者（本院他科へ入院中に当科を紹介された患者を除く）3,819例では県庁所在地のある南部地区が1,947例（51.0%）と過半数を占め、当科所在地である中部地区は1,502例（39.3%）、北部地区は194例（5.1%）であった。離島からは135例（3.5%）の患者が受診していた。
5. 紹介元の診療科別割合は、院外では紹介状のない直接来院例が3,819例中1,887例、49.4%と約半数を占め、歯科関係からは1,351例、35.4%の紹介患者があり、院内からの紹介例は、内科からの177例、30.8%が最も多く認められた。
6. 口腔外科疾患の割合は、炎症647例（19.4%）、

顎関節疾患396例（11.9%）、外傷388例（11.7%）、腫瘍363例（10.8%）、奇形338例（10.1%）、粘膜疾患279例（8.4%）、嚢胞270例（8.1%）であった。その中、炎症性疾患647例では智歯周囲炎が335例（51.8%）、奇形疾患336例では口唇・口蓋裂が220例（65.4%）、良性腫瘍279例では非歯原性腫瘍255例（91.4%）、悪性腫瘍84例では癌腫が79例（94.0%）であった。

本論文の要旨は、第15回日本口腔外科学会北日本地方会で報告した。

文 献

- 1) 山城正宏、儀間 裕、本村和弥、金城 孝、仲宗根康雄、藤井信男：口唇裂口蓋裂の臨床的研究 一第2報、過去8年間の統計的観察一、日口蓋誌 9:48-55,1984.
- 2) 金城秀男、山城正宏、砂川 元、新崎 章、護得久朝保、仲宗根康雄、藤井信男：顎顔面骨骨折の臨床的研究 一第3報：交通事故における統計的観察一、口科誌 37：904-910,1988.
- 3) Sunakawa, H., Yamashiro, M., Kinjo, T., Arasaki, A., Tomishima, O., Kinjo, H., Tsuchihiko, W., Kishaba, M., Ganaha, M., Azuma, T. and Hentona C. : Clinico-pathological studies on effects of induction chemotherapy in squamous cell carcinoma of the gingiva. Asian J. Oral Maxillofac. Surg. 2 : 35-40, 1990.
- 4) 杉 政和、杉山 勝、白砂兼光、西尾順太郎、浦出雅裕、浜村康司、井上一男、綿谷和也、古郷幹彦、松矢篤三：大阪大学歯学部附属病院第1口腔外科における初診患者の臨床統計的観察 一昭和59年度～昭和61年度の3年間に関して一、 阪大歯学雑誌 33:364-373,1988.
- 5) 後藤昌昭、香月 武、副島 渉、久保田英朗、嘉村壽人、古賀正章、中川泰年、石川健一：佐賀医科大学歯科口腔外科における患者管理用データベース作製と開設後5年

- 間の臨床統計的観察、口科誌 37:204-211,1988.
- 6) 大西 真、大山登喜男：長岡赤十字病院歯科口腔外科における最近6年間（昭和56年～昭和61年）の来院患者の臨床統計的観察、日口外誌 33:2487-2495,1987.
- 7) 迫田隅男、川崎清嗣、陶山 隆、錦井英資、真鍋敏彦、有馬良治、芝 良祐：開設後7年間の宮崎医科大学医学部附属病院歯科口腔外科における初診患者の臨床統計的観察、口科誌 36:825-832,1987.
- 8) 澤本正登、沖田 進、小竹 彌、水分寿雄、杉山裕史、吉森寿美代、梶村悦朗、山本康一、古田 勲、早津良和、戸塚盛雄：富山医科薬科大学歯科口腔外科開設後4年間における患者の臨床統計的観察、日口外誌 31:2269-2280,1985.
- 9) 広谷 勝、浜田 傑、杉原正章、内橋隆志、村田俊弘、日浦新次、山元欣司、杉山 勝、薬師寺登、綿谷和也：近畿大学医学部附属病院歯科口腔外科における8年間（1979～1986）の外来患者統計、日口外誌 34:931-942,1988.
- 10) 梁田保美、埜口五十雄、高橋雅幸、佐藤泰則、安藤俊史、葉山 滋、黒川英人、金子徹：防衛医科大学校歯科口腔外科開設後7年10ヶ月間における外来患者の臨床統計的観察（抄）、口科誌 37:1265,1988.
- 11) 中山 弘、岸本 慶、寺尾晃一、西嶋 寛、梅田浩将、青木 修、浅海淳一、片山英彦、中山康弘、角南次郎、鶴田敬司、矢尾尚武、池上信行、高橋利近、西嶋克巳：わが教室における過去15年3ヶ月間の外来患者の臨床統計的観察－岡山大学歯学部口腔外科第一講座－（抄）、口科誌 36:577,1987.
- 12) 自治省行政局編：住民基本台帳に基づく全国人口・世帯数表、人口動態表、平成3年版、138頁、財団法人 国土地理協会発行、平成3年8月10日.
- 13) 厚生省人口問題研究所編：日本の将来推計人口（平成3年6月暫定推計）、10頁、厚生省人口問題研究所 発行、1991年6月6日.

Clinico-Statistical Observations During the Past 3 Years (1986—1988) on New Medical Out-Patients in Our Clinic

Hajime Sunakawa, Tetsuyo Azuma, Masahiro Yamashiro, Takashi Kinjo,
Akira Arasaki, Hiroshi Gima, Moriaki Nishihira, Kazuo Yamauchi,
Kyoko Furugen, Masaru Higa, Manabu Kishaba, Wakatsu Tsuhako,
Keiichi Arakaki, Munenori Ganaha, Shigeru Kamiya,
Yutaka Omine, and Naokatu Kuroshima

Department of Oral Surgery, School of Medicine, University of the Ryukyus
(Chief : prof. Masahiro Yamashiro)

Key words: clinico-statistical observation, out-patient

ABSTRACT

The authors have performed a clinico-statistical observation during the past 3 years (1986—1988) on new patients of the Department of Oral Surgery, School of Medicine, University of the Ryukyus. The results are as follows; 1. Of the 4,394 patients, 2,174 were males and 2,220 were females with a male female ratio of 1.0:1. 2. Patients in their twenties (760 out of 4,394) were the most numerous in age distribution. 3. The ratio of dental disease (1,061) and oral surgical disease (3,333) was 1.0:3.1. Oral surgical disease occupied over 65% in all age-groups. 4. 50.6% (1,932 out of 3,819) patients were referred to us from other dental and medical facilities. 5. All the cases were classified based on the clinical diagnosis as follows; inflammations (647 cases : 19.4%), temporomandibular joint disease (396 cases : 11.9%), traumas (388 cases : 11.7%), tumors (363 cases : 10.8%), malformations and transformations (338 cases : 10.1%), mucosal disease (279 cases : 8.4%) and cysts (270 cases : 8.1%), etc. 6. The most frequently observed disease in each category was pericoronitides of wisdom teeth in inflammations, clefts of lip, alveolus and/or palate in malformations and transformations, non-odontogenic tumors in benign tumors and cancers in malignant tumors.